日蓮大聖人御書全集

善無畏三蔵抄

ぜんむいさんぞうしょう

新版
1182
～
1195

善無畏三蔵抄

文永7年（'70）　49歳　義浄房・浄顕房

法華経は一代聖教の肝心、八万法蔵の依りどころなり。大日経・華厳経・般若経・深密経等の諸の顕密の諸経は、震旦・月氏・竜宮・天上・十方世界の国土の諸仏の説教、恒沙塵数なり。大海を硯の水とし、三千大千世界の草木を筆としても、書き尽くしがたき経々の中をも、あるいはこれを見、あるいは計り推するに、法華経は最第一におわします。

しかるを、印度等の宗、日域の間に、仏意を窺わざる論師・人師多くして、あるいは「大日経は法華経に勝れたり」、ある人々は「法華経は大日経に劣れるのみならず、華厳経にも及ばず」、ある人々は「法華経は涅槃経・般若経・深密経等には劣る」、ある人々は「辺々あり。互いに勝劣ある故に」、ある人云わく「機に随って勝劣あり。時機に叶えば勝れ、叶わざれば劣る」、ある人云わく「有門より得道すべき機あれば、空門をそしり有門をほむ。余もこれをもって知るべし」なんど申す。

その時の人々の中にこの法門を申しやぶる人なければ、おろかなる国王等、深くこれを信ぜさせ給い、田畠等を寄進して、徒党あまたになりぬ。その義、久しく旧りぬれば、ただ「正法なんめり」と打ち思って、疑うこともなく過ぎ行くほどに、末世に彼らが論師・人師より智慧賢き人出来して、彼らが持つところの論師・人師の立義、一々に、あるいは所依の経々に相違するよう、あるいは一代聖教の始末・浅深等を弁えざる故に専ら経文をもって責め申す時、各々、宗々の元祖の邪義扶け難き故に、陳じ方を失

い、あるいは疑って云わく「論師・人師、定めて経論に証文ありぬらん。我が智及ばざれば扶けがたし」、あるいは疑って云わく「我が師は上古の賢哲なり、今、我らは末代の愚人なり」なんど思う故に、有徳・高人をかたらいえて、怨のみなすなり。

しかりといえども、予、自他の偏党をなげすて、論師・人師の料簡を閣いて、専ら経文によるに、法華経は勝れて第一におわすと意得て侍るなり。法華経に勝れておわする御経ありと申す人出来候わば、思しめすべし、「これは

相似の経文を見たがえて申すか。また、人の私に我と経文をつくりて、事を仏説によせて候か。智慧おろかなる者、弁えずして、仏説と号する」なんどと思しめすべし。慧能が壇経、善導が観念法門経、天竺・震旦・日本国に、私に経を説きおける邪師、その数多し。その外、私に経文を作り、経文に私の言を加えなんどせる人々、これ多し。しかりといえども、愚者はこれを真と思うなり。譬えば、天に日月にすぎたる星有りなんど申せば、眼無き者はさもやなんど思わんがごとし。

「我が師は上古の賢哲、汝は末代の愚人」なんど申すことをば、愚かなる者はさもやと思うなり。この不審は今に始まりたるにあらず。陳・隋の代に、智顗法師と申せし小僧一人侍りき。後には二代の天子の御師、天台智者大師と号し奉る。この人、始めいやしかりし時、ただ漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず、月氏一千年の論師をも破せしかば、南北の智人等、雲のごとく起こり、東西の賢哲等、星のごとく列なって、雨のごとく難を下らし、風のごとくこの義を破りしかども、終に論師・人師の偏邪の義を破し

て、天台一宗の正義を立てにき。

日域の桓武の御宇に、最澄と申す小僧侍りき。後には伝教大師と号し奉る。欽明已来の二百余年の諸の人師の諸宗を破りしかば、始めは諸人いかりをなせしかども、後には一同に御弟子となりにき。これらの人々の難に、「我らが元祖は四依の論師、上古の賢哲なり。汝は像末の凡夫・愚人なり」とこそ難じ侍りしか。正像末には依るべからず、実経の文に依るべきぞ。人には依るべからず、専ら道理に依るべきか。外道、仏を難じて云わく「汝は成劫

の末、住劫の始めの愚人なり。我らが本師は先代の智者、二天三仙これなり」なんど申せしかども、終に九十五種の外道とこそ捨てられしか。

日蓮、八宗を勘えたるに、法相宗・華厳宗・三論宗等は、権経に依って、あるいは実経に同じ、あるいは実経を下せり。これ論師・人師より誤りぬと見えぬ。倶舎・成実は子細ある上、律宗なんどは小乗最下の宗なり。人師より権大乗・実大乗経になれり。

真言宗・大日経等は、いまだ華厳経等にも及ばず。い

かにいわんや、涅槃・法華経等に及ぶべしや。しかるに、善無畏三蔵は、華厳・法華・大日経等の勝劣を判ずる時、理同事勝の謬釈を作りしより已来、あるいはおごりをなして「法華経は華厳経にも劣りなん。いかにいわんや真言経に及ぶべしや」、あるいは云わく「印・真言のなきことは、法華経に諍うべからず」、あるいは云わく「天台宗の祖師、多く真言宗を勝ると云い、世間の思いも真言宗勝れたるなんめりと思えり」。日蓮このことを計るに、人多く迷うことなれば、委細にかんがえたるなり。ほぼ余処に注せ

り。見るべし。また 志 あらん人々は、存生の時、習い伝うべし。人の多くおもうにはおそるべからず、また時節の久・近にも依るべからず、専ら経文と道理とに依るべし。浄土宗は曇鸞・道綽・善導より誤り多くして多くの人々を邪見に入れけるを、日本の法然これをうけ取って、人ごとに念仏を信ぜしむるのみならず、天下の諸宗を皆失わんとするを、叡山三千の大衆・南都の興福寺・東大寺の八宗よりこれをせく故に、代々の国王勅宣を下し、将軍家より御教書をなしてせけどもとどまらず、いよいよ繁昌して、

返って主上・上皇より万民等にいたるまで皆信伏せり。

しかるに、日蓮は、安房国東条の片海の石中の賤民が子なり。威徳なく、有徳のものにあらず。なににつけてか、南都北嶺のとどめがたき、天子・虎牙の制止に叶わざる念仏をふせぐべきとは思えども、経文を亀鏡と定め、天台・伝教の指南を手ににぎりて、建長五年より今年文永七年に至るまで十七年が間これを責めたるに、日本国の念仏、大体留まり了わんぬ。眼前にこれ見えたり。また口にすてぬ人々はあれども、心ばかりは念仏は生死をはなるる道にはあらざ

りけると思う。

禅宗もってかくのごとし。一をもって万を知れ。真言等の諸宗の誤りをだに留めんこと、手ににぎりておぼゆるなり。いわんや、当世の高僧・真言師等は、その智牛馬に劣もおとり、蛍火の光にもしかず。ただ死せるものの手に弓箭結をゆいつけ、寝言ねごとするものに物問をとうがごとし。手に印を結び、口に真言は誦すれども、その心中には義理を弁うることなし。結句、慢心は山のごとく高く、欲心は海よりも深し。これは皆、自ら経論の勝劣に迷うより事起こ

り、祖師の誤りをたださざるによるなり。

詮ずるところは、智者は八万法蔵をも習うべし、十二部経をも学すべし。末代濁悪世の愚人は、念仏等の難行・易行等をば抛って、一向に法華経の題目を南無妙法蓮華経と唱え給うべし。日輪、東方の空に出でさせ給えば、南浮の空、皆明らかなり。大光を備え給える故なり。蛍火はいまだ国土を照らさず、宝珠は懐中に持ちぬれば万物皆ふらさずということなし。瓦石は財をふらさず。念仏等は、法華経の題目に対すれば、瓦石と宝珠と、蛍火と日光とのごとし。我ら

が昧き眼をもって、蛍火の光を得て物の色を弁うべしや。かたがた凡夫の叶いがたき法は、念仏・真言等の小乗・権経なり。

また、我が師・釈迦如来は、一代聖教、乃至八万法蔵の説者なり。この娑婆、無仏の世の最先に出でさせ給いて、一切衆生の眼目を開き給う御仏なり。東西十方の諸の仏菩薩も、皆この仏の教えなるべし。譬えば、皇帝已前は、人、父をしらずして畜生のごとし。堯王已前は、四季を弁えず、牛馬の癡かなるに同じかりき。仏世に出でさせ給わ

ざりしには、比丘・比丘尼の二衆もなく、ただ男女二人にて候いき。今、比丘・比丘尼の真言師等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し、念仏者等が阿弥陀仏を一向に持って釈迦如来を抛ちたるも、教主釈尊の比丘・比丘尼なり。元祖が誤りを伝え来るなるべし。

この釈迦如来は、三つの故ましまして、他仏にかわらせ給いて娑婆世界の一切衆生の有縁の仏となり給う。

一には、この娑婆世界の一切衆生の世尊にておわします。阿弥陀仏はこの国の大王にはあらず。釈迦仏は、譬えば我が

国の主上のごとし。まずこの国の大王を敬って、後に他国の王をば敬うべし。天照太神・正八幡宮等は我が国の本主なり。迹化の後、神と顕れさせ給う。この神にそむく人、この国の主となるべからず。されば、天照太神をば鏡にうつし奉りて内侍所と号す。八幡大菩薩に勅使有って物申しあわさせ給いき。大覚世尊は我らが尊主なり、まず御本尊と定むべし。

二には、釈迦如来は娑婆世界の一切衆生の父母なり。まず我が父母を孝し、後に他人の父母には及ぼすべし。例せ

ば、周の武王は父の形を木像に造って、車にのせて戦の大将と定めて天感を蒙り、殷の紂王をうつ。舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙をながし、手をもってのごいしかば、本のごとく眼あきにけり。この仏もまたかくのごとし。我ら衆生の眼をば開仏知見とは開き給いしか。いまだ他仏は開き給わず。

三には、この仏は娑婆世界の一切衆生の本師なり。この仏は、賢劫第九・人寿百歳の時、中天竺の浄飯大王の御子、十九にして出家し、三十にして成道し、五十余年が

間一代聖教を説き、八十にして御入滅、舎利を留めて一切衆生を正像末に救い給う。阿弥陀如来・薬師仏・大日等は、他土の仏にして、この世界の世尊にてはましまさず。

この娑婆世界は、十方世界の中の最下の処、譬えば、この国土の中の獄門のごとし。十方世界の中の十悪五逆・誹謗正法の重罪・逆罪の者を諸仏如来擯出し給いしを、釈迦如来、この土にあつめ給う。三悪ならびに無間大城に堕ちて、その苦をつぐのいて、人中・天上には生まれたれども、その罪の余残ありて、ややもすれば正法を謗じ

智者を罵り罪つくりやすし。例せば、身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり。畢陵は見思を断ぜしかども慢心の形みゆ。難陀は婬欲を断じても女人に交わる心あり。煩悩を断じたれども余残あり。いかにいわんや凡夫においてをや。されば、釈迦如来の御名をば能忍と名づけて、この土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び給う故なり。これらの秘術は他仏のかけ給えるところなり。

阿弥陀仏等の諸仏世尊、悲願をおこさせ給いて、心にはじをおぼしめして、還ってこの界にかよい、四十八願・

十二大願なんどは起こさせ給うなるべし。観世音等の他土の菩薩も、またまたかくのごとし。仏には、常平等の時は、一切諸仏は差別なけれども、常差別の時は、各々に十方世界に土をしめて、有縁・無縁を分かち給う。大通智勝仏の十六王子、十方に土をしめて、一々に我が弟子を救い給う。その中に、釈迦如来は、この土に当たり給う。我ら衆生もまた生を娑婆世界に受けぬ。いかにも釈迦如来の教化をばはなるべからず。しかりといえども、人皆これを知らず。委しく尋ねあきらめば、「ただ我一人のみ、能く救護をなす」

と申して、釈迦如来の御手を離るべからず。しかれば、この土の一切衆生、生死を厭い御本尊を崇めんとおぼしめさば、必ずまず釈尊を木画の像に顕して御本尊と定めさせ給いて、その後、力おわしまさば、弥陀等の他仏にも及ぶべし。

しかるを、当世、聖行なきこの土の人々の仏をつくり画かせ給うに、まず他仏をさきとするは、その仏の御本意にも釈迦如来の御本意にも叶うべからざる上、世間の礼儀にもはずれて候。されば、優塡大王の赤梅檀いまだ他仏

刻
をばきざませ給わず、仙道王の画像も釈迦如来なり。

しかるを、諸大乗経による人々、我が所依の経々を諸経に勝れたりと思う故に、教主釈尊をば次ざまにし給う。一切の真言師は、大日経は諸経に勝れたりと思う故に、この経に詮とする大日如来を我らが有縁の仏と思い、念仏者等は、観経等を信ずる故に、阿弥陀仏を娑婆有縁の仏と思う。当世は、ことに善導・法然等が邪義を正義と思って、浄土の三部経を指南とする故に、十造る寺は八・九は阿弥陀仏を本尊とす。在家・出家、一家・十家・百家・千家

にいたるまで、持仏堂の仏は阿弥陀なり。その外、木画の像、一家に千仏・万仏まします大旨は阿弥陀仏なり。しかるに、当世の智者とおぼしき人々、これを見てわざわいとは思わずして、我が意に相叶う故に、ただ称美・讃歎の心のみあり。ただ一向悪人にして、因果の道理をも弁えず一仏をも持たざる者は、還って失なきへんもありぬべし。

我らが父母たる世尊は、主師親の三徳を備えて、一切の仏に擯出せられたる我らを、「ただ我一人のみ、能く救護をなす」とはげませ給う。その恩、大海よりも深し。その恩、

大地よりも厚し。その恩、虚空よりも広し。二つの眼をぬいて仏前に空の星の数備うとも、身の皮を剝いで百千万天井にはるとも、涙を閼伽の水として千万億劫仏前に花を備うとも、身の肉血を無量劫仏前に山のごとく積み大海のごとく湛うとも、この仏の一分の御恩を報じ尽くしがたし。

しかるを、当世の僻見の学者等、たとい八万法蔵を極め、十二部経を諳んじ、大小の戒品を堅く持ち給う智者なりとも、この道理に背かば悪道を免るべからずと思しめすべし。

例せば、善無畏三蔵は、真言宗の元祖、烏萇奈国の大王・仏手王の太子なり。教主釈尊は十九にして出家し給いき。この三蔵は十三にして位を捨て、月氏七十箇国、九万里を歩き回って、諸経・諸論・諸宗を習い伝え、北天竺の金粟王の塔の下にして天に仰ぎ祈請を致し給えるに、虚空の中に大日如来を中央として胎蔵界の曼荼羅顕れさせ給う。慈悲の余り、この正法を辺土に弘めんと思しめして漢土に入り給い、玄宗皇帝に秘法を授け奉り、旱魃の時、雨の祈りをし給いしかば、三日が内に天より雨ふりしなり。この

三蔵は、千二百余尊の種子・尊形・三摩耶、一事もくもりなし。当世の東寺等の一切の真言宗、一人もこの御弟子にあらざるはなし。

しかるに、この三蔵、一時、頓死ありき。数多の獄卒来って鉄縄七すじ懸けたてまつり、閻魔王宮に至る。この事、第一の不審なり。いかなる罪あって、この責めに値い給いけるやらん。今生は十悪は有りもやすらん、五逆罪は造らず。過去を尋ぬれば、大国の王となり給うことを勘うるに、十善戒を堅く持ち、五百の仏陀に仕え給うなり。何の罪か

あらん。その上、十三にして位を捨てて出家し給いき。閻浮第一の菩提心なるべし。過去・現在の軽重の罪も滅すらん。その上、月氏に流布するところの経論・諸宗を習い極め給いしなり。何の罪か消えざらん。また真言密教は他に異なる法なるべし。一印・一真言なれども、手に結び口に誦すれば、三世の重罪も滅せずということなし。無量俱低劫の間作るところの衆の罪障も、この曼荼羅を見れば、一時に皆消滅すとこそ申し候え。いわんや、この三蔵は、千二百余尊の印・真言を諳に浮かべ、即身成仏の

観道鏡に懸かり、両部灌頂の御時、大日覚王となり給いき。いかにして閻魔の責めに預かり給いけるやらん。

日蓮は、顕密二道の中に勝れさせ給いて我ら易々と生死を離るべき教えに入らんと思い候いて、真言の秘教をあらあら習い、このことを尋ね勘うるに、一人として答えをする人なし。この人悪道を免れずば、当世の一切の真言ならびに一印・一真言の道俗、三悪道の罪を免るべきや。

日蓮このことを委しく勘うるに、二つの失有って閻魔王の責めに預かり給えり。一には、大日経は法華経に劣るの

みにあらず、涅槃経・華厳経・般若経等にも及ばざる経にて候を、法華経に勝れたりとする謗法の失なり。二には、大日如来は釈尊の分身なり。しかるを大日如来は教主釈尊に勝れたりと思いし僻見なり。この謗法の罪は、無量劫の間千二百余尊の法を行ずとも、悪道を免るべからず。この三蔵、この失免れ難き故に、諸尊の印・真言を作せども叶わざりしかば、法華経第二の譬喩品の「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。

ただ我一人のみ、能く救護をなす」の文を唱えて、鉄の縄を免れさせ給いき。

しかるに、善無畏已後の真言師等は、「大日経は一切経に勝るるのみにあらず、法華経に超過せり」、あるいは「法華経は華厳経にも劣る」なんど申す人もあり。これらは、人は異なれども、その謗法の罪は同じきか。また、善無畏三蔵は、法華経と大日経と大事とすべしと深理をば同ぜさせ給いしかども、印と真言とは法華経は大日経に劣りけるとおぼせし僻見ばかりなり。その已後の真言師等は、大事

の理をも法華経は劣れりと思えり。印・真言はまた申すに及ばず。謗法の罪遥かにかさみたり。閻魔の責めにて堕獄の苦を延ぶべしとも見えず。直ちに阿鼻の炎をや招くらん。

大日経には、本、一念三千の深理なし。この理は法華経に限るべし。善無畏三蔵、天台大師の法華経の深理を読み出ださせ給いしを、盗み取って大日経に入れ、法華経の荘厳として説かれて候 大日経の印・真言を、彼の経の得分と思えり。理も同じと申すは僻見なり。真言・印契を得分と思うも邪見なり。譬えば、人の下人の六根は主の物なるべ

し。しかるを、我が財と思う故に、多くの失出で来る。この譬えをもって諸経を解るべし。劣る経に説く法門は、勝れたる経の得分と成るべきなり。

しかるを、日蓮は安房国東条郷清澄山の住人なり。幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云わく「日本第一の智者となし給え」と云々。虚空蔵菩薩、眼前に高僧となせ給いて、明星のごとくなる智慧の宝珠を授けさせ給いき。そのしるしにや、日本国の八宗ならびに禅宗・念仏宗等の大綱、ほぼ伺い侍りぬ。殊には建長五年の比より今

文永七年に至るまで、この十六・七年の間、禅宗と念仏宗とを難ずる故に、禅宗・念仏宗の学者、蜂のごとく起こり、雲のごとく集まる。これをつむること、一言二言には過ぎず。結句は天台・真言等の学者、自宗の廃立を習い失って、我が心と他宗に同じ、在家の信をなせることなれば、彼の邪見の宗を扶けんがために「天台・真言は念仏宗・禅宗に等し」と料簡しなして、日蓮を破するなり。これは、日蓮を破するようなれども、我と天台・真言等を失う者なるべし。能く能く恥ずべきことなり。この

諸経・諸論・諸宗の失を弁うることは、虚空蔵菩薩の御利生、本師・道善御房の御恩なるべし。

亀魚すら恩を報ずることあり。いかにいわんや人倫をや。この恩を報ぜんがために、清澄山において仏法を弘め道善御房を導き奉らんと欲す。しかるに、この人、愚癡におわする上、念仏者なり。三悪道を免るべしとも見えず。しかもまた、日蓮が教訓を用うべき人にあらず。しかれども、文永元年十一月十四日、西条華房の僧坊にして見参に入りし時、彼の人云わく「我智慧なければ請用の望みもな

し。年老いていらえなければ、念仏の名僧をも立てず。世間に弘まることなれば、ただ南無阿弥陀仏と申すばかりなり。また、我が心より起こらざれども、事の縁有って阿弥陀仏を五体まで作り奉る。これまた過去の宿習なるべし。この科によって地獄に堕つべきや」等云々。

その時に、日蓮、意に念わく「別して中違いまいらすることなけれども、東条左衛門入道蓮智が事によって、この十余年の間は見奉らず。ただし中不和なるがごとし。穏便の義を存し、おだやかに申すことこそ礼儀なれ」とは思

いしかども、「生死界の習い、老少不定なり。また二度見参のこと難かるべし。この人の兄・道義房義尚、この人に向かって無間地獄に堕つべき人と申して有りしが、臨終思うようにもましまさざりけるやらん。この人もまたしかるべし」と哀れに思いし故に、思い切って強々に申したりき。

「阿弥陀仏を五体作り給えるは、五度無間地獄に堕ち給うべし。その故は、正直捨方便の法華経に『釈迦如来は我らが親父、阿弥陀仏は伯父』と説かせ給う。我が伯父をば五体まで作り供養せさせ給いて、親父をば一体も造り給わざり

けるは、あに不孝の人にあらずや。中々、山人・海人なんどが、東西をしらず一善をも修せざる者は、還って罪浅き者なるべし。当世の道心者が後世を願うとも、法華経・釈迦仏をば打ち捨てて、阿弥陀仏・念仏なんどを念々に捨て申さざるは、いかがあるべかるらん。打ち見るところは善人とは見えたれども、親を捨てて他人につく失、免るべしとは見えず。一向悪人は、いまだ仏法に帰せず、釈迦仏を捨て奉る失も見えず、縁有って信ずる辺もや有らんずらん。善導・法然ならびに当世の学者等が邪義に就いて、阿弥陀仏

を本尊として一向に念仏を申す人々は、多生曠劫をふるとも、この邪見を翻して釈迦仏・法華経に帰すべしとは見えず。されば、双林最後の涅槃経に十悪五逆よりも過ぎておそろしきものを出ださせ給うに、『謗法・闡提と申して、二百五十戒を持ち三衣一鉢を身に纏える智者どもの中にこそ有るべし』と見え侍れ」と、こまごまと申して候いしかば、この人もこころえずげに思っておわしき。

傍座の人々も、こころえずげにおもわれしかども、その後承りしに、法華経を持たるるの由承りしかば、「この

人邪見を翻し給うか。善人に成り給いぬ」と悦び思い候ところに、またこの釈迦仏を造らせ給うこと、申すばかりなし。当座には強げなる様にありしかども、法華経の文のままに説き候いしかば、こうおれさせ給えり。「忠言耳に逆らい、良薬口に苦し」と申すことは、これなり。

今既に、日蓮、師の恩を報ず。定めて仏神、納受し給わんか。各々この由を道善房に申し聞かせ給うべし。

たとい強言なれども、人をたすくれば実語・軟語なるべし。たとい軟語なれども、人を損ずるは妄語・強言なり。当世

の学匠等の法門は、軟語・実語と人々は思しめしたれども、皆、強言・妄語なり。仏の本意たる法華経に背く故なるべし。日蓮が「念仏申す者は無間地獄に堕つべし。禅宗・真言宗もまた謬りの宗なり」なんど申し候は、強言とは思しめすとも、実語・軟語なるべし。例せば、この道善御房の法華経を迎え釈迦仏を造らせ給うことは、日蓮が強言より起こる。

日本国の一切衆生も、またまたかくのごとし。当世、この十余年已前は一向念仏者にて候いしが、十人が一・二人

は一向に南無妙法蓮華経と唱え、二・三人は両方になり、また一向念仏申す人も、疑いをなす故に、心中に法華経を信じ、また釈迦仏を書き造り奉る。これまた日蓮が強言より起こる。譬えば、栴檀は伊蘭より生じ、蓮華は泥より出でたり。しかるに、「念仏は無間地獄に堕つる」と申せば、当世牛馬のごとくなる智者どもが、日蓮が法門をかりそめにも毀るは、糞犬が師子王をほえ、癡猿が帝釈を笑うに似たり。

文永七年

日蓮　花押

義浄房（ぎじょうぼう）・浄顕房（じょうけんぼう）